

ライフスタイルデザイン研究所の活動報告

—カラーユニバーサルデザイン研究会—

研究会の目指すテーマは・・・

「色覚障がい者や白内障の方に判別しやすい情報伝達。
そして、一般正常色覚者に対して美しく見えること。」

・誰にでもわかりやすい「色」と「文字」についての研究です。学識経験者にもユニバーサルデザインの観点から、貴重なご意見をいただきました。

【色について】

・現在、日本塗料工業会から「推奨配色セット」など、目安となる配色の基準が発表されていますが、これをそのまま使うのではなく、設計者のデザインセンスを反映したものにすべきです。

・色は自由に選択可能ですが「色覚シミュレーション」が必須となります。

・身近なところでは、Adobe illustrator、Photoshopの“校正設定”内にP型*・D型*の色覚シミュレーションのコマンドがあります。

(*P型：一型2色覚(赤錐体異常)約1.5%、D型：二型2色覚(緑錐体異常)約3.5%、一般正常色覚者約95%。数値は日本人男性による。)

【ユニバーサルな色の使い方のガイドライン(素案)】

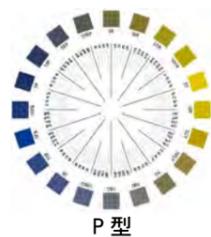
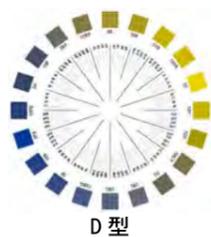
・一般正常色覚者に最も見やすい強調色の**赤**は、色覚障がい者には**茶系**に見えます。背景色や文字の大きさ、太さ、表示位置などに配慮をする必要があります。

・**青**と**黄**は色覚障がい者と一般正常色覚者どちらも似た見え方をします。**青地**に白の**車椅子ピクト**や、**黄色点字ブロック**の視覚効果がわかります。

・**ピンク**+**水色**の組合せは、色覚障がい者には近似して見えるため、識別できません。色間に**緑**や**オレンジ**などを配色する工夫が必要です。

・色覚障がい者に識別しやすくても、一般正常色覚者や白内障には識別しづらい配色があります。一般正常色覚者や白内障は**白+黄**や**黒+紺**など明度差の少ない色の組み合わせは識別がしづらいため、明度差をつける必要があります。一方、色覚障がい者は、「明度差に敏感」で**白+黄**は一般正常色覚者や白内障に比べ見分けがしやすい。色覚障がい者は正常色覚者や白内障にわかりづらいといわれている、**赤~赤紫**、**青~緑**への変化も識別しやすい特徴があります。

・色覚障がい者が識別しづらい**緑**と**赤**の組み合わせの場合は、**緑**を**青緑**に変えることで**赤**と識別がしやすくなります。**赤**と**黒**は、**赤**を**朱色**に変えることで**黒**と識別がしやすくなります。



■illustratorCSSによるマンセル色相環シミュレーション
(色相環の配色カラーはDIC HP掲載カラーによる。)

文：高野直樹

知恵の連携・統合についての報告

—北大江のまちづくり—

・本社および大阪事務所が所在する北大江地区において「住み、働き、学び、遊ぶ、全てが快適な都心づくり」をめざして、1998年に北大江地区まちづくり実行委員会が発足しました。

・住民と企業や官公署、学校等の事業所、従業者等が分け隔てなく継続して協力しまちづくり活動を行っています。当社も地域社会への貢献の観点から地域の住民や企業の方々とともに様々な活動に参画しています。

北大江たそがれコンサートWeek 2012

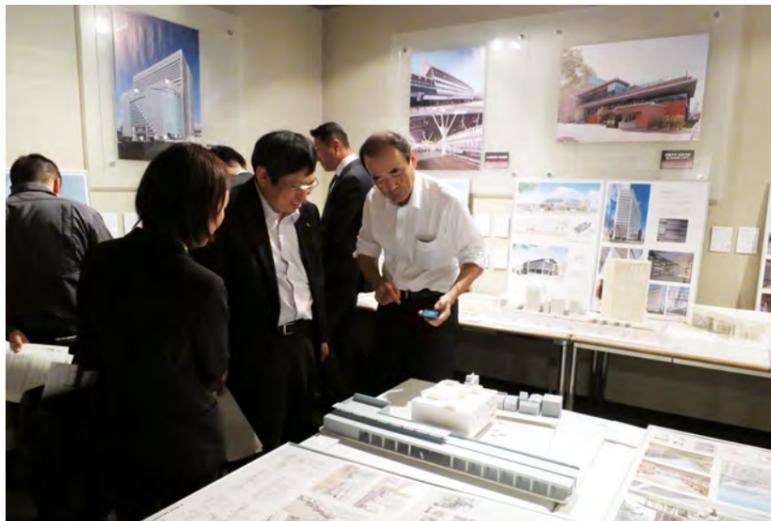
・地区は楽器の専門店や工房が集まる楽器の街でもあります。北大江公園の改良工事の完成と芝生広場のお披露目も兼ねて2006年に始まった「北大江たそがれコンサート」は、今では「コンサートWeek」として地区内の飲食店などを会場に1週間にわたり開催され、秋の風物詩として多くの人に親しまれています。

・今年も、当社においても、10月17日に京都を拠点とするアーティスト「モラル」によるコンサートを1階ロビーで開催しました。



安井建築設計事務所オープンハウス

・たそがれコンサートWeekにあわせ、10月16~17日に当社において北大江の企業5社共催によるオープンハウスを開催し、各企業の日頃の活動を写真や映像、模型などで紹介して好評を博しました。



文：山本勝彦

RESEARCH ACTIVITIES

Oct.2012

Vol.7

ライフスタイルデザイン研究所の活動状況

・当社では、社会状況の変化に対応したライフスタイルの変化が都市や建築をどのように変えていくのかについて、社内外の「知恵の連携と統合」を進めながら、多くの研究と提案を行っていきたくと考え、「ライフスタイルデザイン研究所」を設立しています。

・歴史的都市における公共建築のあり方を研究している**小田原研究会**は、東海大学杉本研究室との共同研究を進めており、現在は現地調査や類似事例調査、模型を使ったスタディなどを行っています。

・また、8月末にはこれからの公共建築のあり方について、株式会社シアターワークショップの伊東正示氏を講師として招き、勉強会を行いました。

・当社独自のカラーユニバーサルデザインガイドラインの作成を行う**カラーユニバーサルデザイン研究会**では、学識経験者へのヒアリングや社内研究会を行いながらガイドライン作成に向けた作業を行っています。

ライフスタイルデザイン研究所

シュリンキング・シティ研究会

廃校利用研究会

小田原研究会

ライフスタイルセンター事業モデル研究会

震災復興研究会

カラーユニバーサルデザイン研究会

東海大学杉本洋文研究室

株式会社 安井建築設計事務所

ライフスタイルデザイン研究所

研究会活動の概要

研究会全体の状況

- ・前号の発行以降、第4回～第6回の研究会が行われました。
- ・第5回については株式会社シアターワークショップとの勉強会を行いました。（詳細は下記及び右記の記事を参照）
- ・第4回、第6回については東海大学杉本研究室と合同で、現地調査や類似事例調査等による都市の分析を踏まえ、歴史的都市における公共建築の建物デザインを検討しました。
- ・その結果、「周辺の街並みとの調和」、「より多くの人々に受け入れられやすい建物デザイン」の2つの視点より、「地域らしさ（小田原らしさ）」に関するキーワードを抽出し、整理しました。
- ・今後はケーススタディとして、具体的な敷地や用途を選定した上で、土地利用やボリューム検討等を行っていく予定です。



小田原研究会の様子

勉強会の概要

小田原における公共施設の勉強会

歴史的都市における公共施設のあり方を研究している小田原研究会において、8月31日に株式会社シアターワークショップの伊東正示氏を講師として招き、公共施設のあり方の一例として、これからの市民ホールのあり方についての勉強会を行いました。

勉強会では、伊東正示氏が劇場コンサルタントとして携わった代表事例の紹介や、これからの市民ホールのあり方についてのレクチャー、そして質疑応答が行われ、活発な意見交換をしました。

伊東正示氏とは

1987年より劇場コンサルタントとして、劇場の構想段階における基本コンセプトの明確化とプログラムの作成、施設計画における最新劇場技術を駆使した新しい劇場空間の提案、構想段階からの管理運営に関する検討と開場準備、計画の初期段階からの市民参加のコーディネート等の業務を行っています。

勉強会の議論のポイント

市民ホール計画におけるポイント

- ポイント1. これからの市民ホールのあり方**
→市民が参加する芸術活動を支える場をどう作り上げるか。
- ポイント2. これまでの市民ホールとこれからの市民ホールの違い**
→特定の人を対象とした芸術活動でなく、誰でも気軽に楽しめる芸術活動をどう展開するか。
- ポイント3. 複合芸術文化をつくりだすためのホールの機能**
→幅広い市民の利用を想定し、多様化した用途をどう構成するか。
- ポイント4. 地域の魅力を伝えるホール**
→自主事業（市民主体のイベント）による話題づくりをどう行うか。
- ポイント5. 催し物がなくても立ち寄れるホール**
→いつでも誰でも気軽に使える機能、空間構成をどう計画するか。



勉強会の様子（事例の紹介）

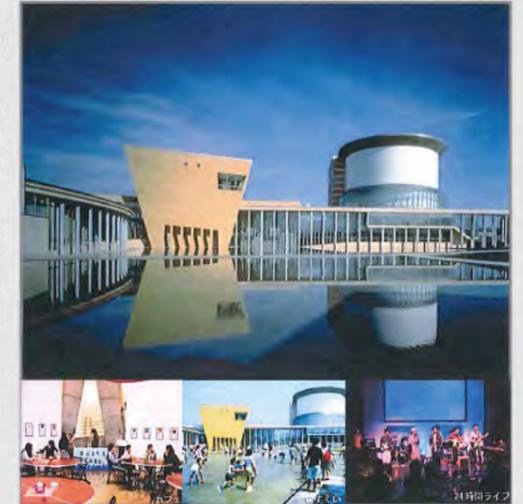


勉強会の様子（レクチャー）

参考事例（伊東正示氏が携わった作品）

事例1. 黒部市国際文化センター・コラーレ

- ・計画段階から市民が参加し市民の声により施設が計画されていった。
- ・例えば日常的にふらっと来て楽しめるようするための無料の暖炉や本が読めるスペースなど。
- ・市民参加が発展し、黒部文化倶楽部という文化クラブができプログラム運営等にかかわるなど市民主体の施設運営を行っている。
- ・開館前にはプレイベントとして、公営ホールでの24時間ライブを行うなど、様々なイベントを行った。



事例2. 北上市文化交流センター・さくらホール

- ・大中小のホールと豊富な練習室が配置。（21の練習室が設けられている。）
- ・大中小の各ホール間に練習室が配置され、ホールと練習室をセットで使うことにより稼働率が高い。
- ・演劇等を練習する人と、静かな場所で勉強等をする人はスペースは分離されているが、ガラス越しに見られるの関係がつけられ、刺激しあえる関係がつけられている。
- ・公営だが、年末のカウントダウンのイベントを行っている。



事例3. 茅野市民館

- ・構想段階から市民参加が行われた。
- ・市民主体で委員会等で議論を行い、決定内容を行政が後押しする形で計画を進めた。
- ・基本計画策定の前に設計者を決め、設計者と話をしながら計画を進めていった。
- ・ホールと隣接する中庭がフラットで計画されていて、壁を開放すれば一体的な使用が可能となる。（結婚式等も行われた）
- ・開館前のプレイベントを、開館後の継続的なイベント事業につなげている。

